静岡発 こう読む

「日常」が困難な時代

▶▶▶加藤　裕治

あっという間の師走である。

中日新聞記事データベースで一月から十一月までの期間を「コロナ」で検索すると、ウイルスのコロナでないものも含むだろうが、約五万七千件がヒットした。一日あたりの記事数は六百程度なので、ざっと百日分が、コロナに関わる記事で埋め尽くされる。そんな一年だった。

第一報はおそらく一月十日、「新型コロナウイルス検出　中国武漢の原因不明肺炎」という見出しの小さな記事だ。この記事を読み、今回の事態を想定した人がどれほどいただろうか。

また四月二十九日には「9月入学制　17知事要請へ」の記事がある。緊急事態宣言が発出された中、日々の授業を維持するために、困難な取り組みをしていた時期だ。九月入学の方針が進んでいたら、受験だけでなく、日々の授業も取り返しのつかない停滞を招いていたに違いない。なぜそんな突飛な奇策を唱えたのか。政治とは、日常を安心して生活できるようにすることではないのか。不思議でならない。

そして今、報道によれば、医療現場は看護師の退職も増え、医師や看護師の確保が難しくなっているという。

これまで私たちは医療を、ごく普通に日常的に受診できるものと考えていた。しかし、ごく普通に医療を受けられるのは、医療を維持する人々が存在するからだ。当たり前の日常は、奇策では維持できない。従事する人々の地道な支えが必要なのだ。今、それが揺らいでいる。

「鬼滅の刃」が大ヒットしている。鬼殺隊（政府非公認という設定だ）と呼ばれる組織の剣士たちが、世に跋扈する人喰いの鬼と戦う物語だ。鬼を倒す剣士達は人知れず密かに、しかし命をかけて、人々の平和な日常を支えるために奮闘する。

この作品には、「日常」がただそこにあるのではなく、それを支える人々が存在し、それで維持され、それゆえに尊いというメッセージが込められている。多くの共感を呼ぶのは、こんな理由からかもしれない。

（静岡文化芸術大学教授）

2020.12.13
中日新聞（朝刊）P.5